

イチゴ「ひのしずく」における栽植様式と収量性及び春期の作業性の改善

イチゴ「ひのしずく」において、畝幅と株間を広げることで、単位面積当りの春期の玉だし作業は軽減できる。春期の立ち上がり対策には、株間より畝幅（条間）を広げることが有効である。10a 当りの栽植本数は、畝幅 120cm では株間 25cm、畝幅 135cm では株間 23cm 程度にすることによって、年内収量及び総収量が確保できる。

農業研究センター農産園芸研究所野菜研究室（担当者：田尻一裕）
い業研究所作付体系研究室（担当者：中河原一布）

研究のねらい

本県で育成した「ひのしずく」は、大果で良食味といった果実品質の評価は高いが、春先の生育が旺盛になりやすく、管理面で労力を要したり一部では品質が低下するなど、春先の生育コントロールが課題となっている。

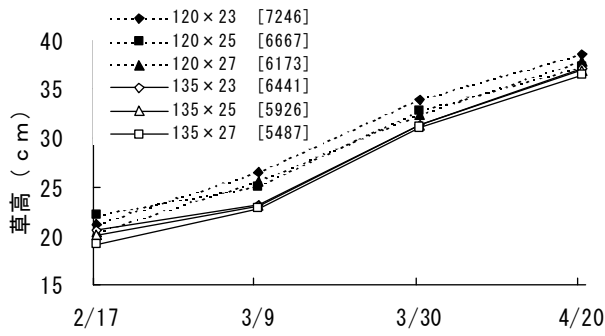
そこで、収量性を維持し、生育後期の作業性を改善し品質を安定させることを目的に、栽植様式の違いが生育、収量及び作業性に及ぼす影響を検討し、「ひのしずく」の安定生産技術を確立する。

研究の成果

1. 2月中旬以降の草高の推移は、3月30日調査までは畝幅120cmが135cmより高く推移し、4月20日調査では畝幅による差は少ない。株間の影響は少ないが、畝幅120cm・株間23cmでやや高い傾向にある（図1）。
2. 春期の作業性（玉だし作業）は、株当りの作業時間では3月1日及び4月19日のいずれも畝幅120cm・株間23cmで時間が最も長い（図2）。
3. 10a当りの作業時間は、畝幅120cm・株間23cmで最も長く、畝幅、株間ともに広いほど少なく、最も作業時間の長かった畝幅120cm・株間23cmに対し、畝幅・株間が広い場合約20～35%程度作業時間が短い（図3）。
4. 株当りの可販果収量は、畝幅、株間ともに広いほど多く、特に3月以降の差が顕著である（図4、図6）。
5. 年内収量は畝幅120cmが135cmより多く、株間はいずれの畝幅も27cm及び29cmが23cm及び25cmより少なく、23cmと25cmではほとんど差はない。総収量は畝幅による差はなく、株間は27cm及び29cmで少ない傾向にある（図5、図7）。

普及上の留意点

1. 試験は、平成23年度に普通育苗の苗を用いて、農産園芸研究所野菜研究室とい業研究所作付体系研究室の2ヶ所で実施し、条間は畝幅120cmが23cm、畝幅135cmが30cmとした。
2. 畝幅が広い場合は、かん水施設によっては畝全体が乾燥しやすいので、かん水方法に注意する。
3. 経営面から、収量性、作業性を考慮して栽植様式を決定する。



注) 図の凡例
 畝幅 (cm) × 株間 (cm)
 [10 a 当り栽植本数]

図1 春期の草高の推移 (農産園芸野菜研究室)

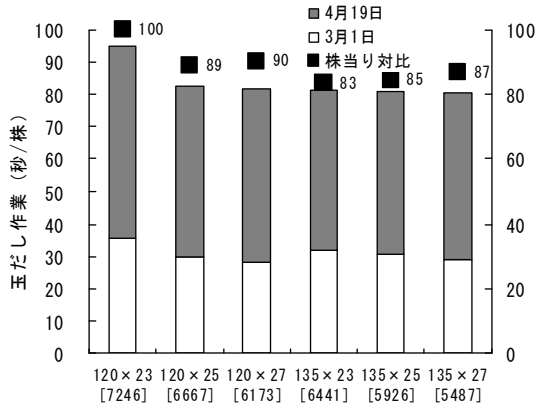


図2 春期の株当りの玉だし作業時間 (農産園芸野菜研究室)

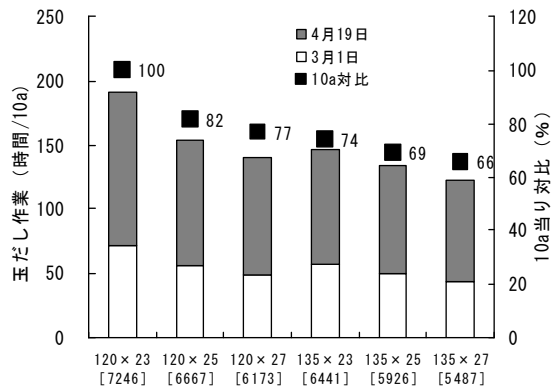


図3 春期の10a当りの玉だし作業時間 (農産園芸野菜研究室)

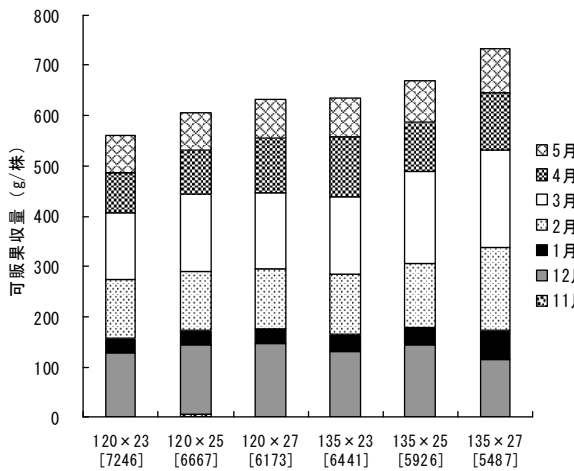


図4 株当り月別可販果収量 (農産園芸野菜研究室)

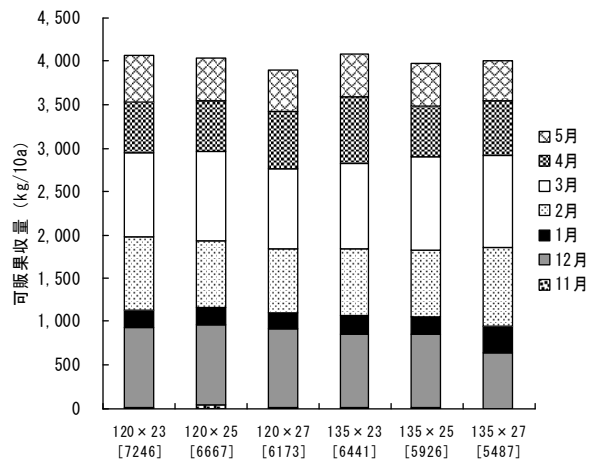


図5 10a当り月別可販果収量 (農産園芸野菜研究室)

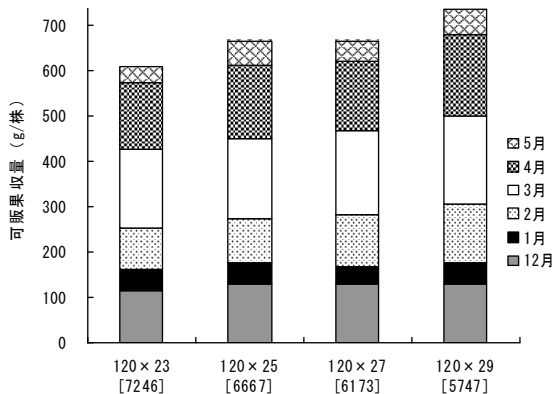


図6 株当り月別可販果収量 (い業研作付体系研究室)

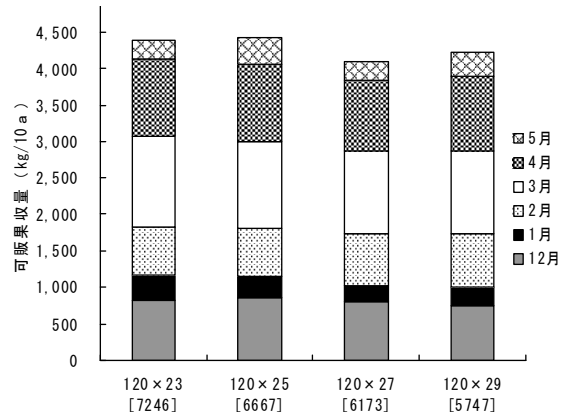


図7 10a当り月別可販果収量 (い業研作付体系研究室)